



塩

尻

三篇

三

1管5
508
55



明人陳元賢筆せし聖号と穂積氏此正藏方
傳系先師孔子神位と有穂積氏云陳氏此聖号と筆
せし時側に印石有りて此正藏此方と云と施
し之を以て陳氏云凡聖賢其名と書し
ハ更ハ我々と施し之を傳ふる事ハ此正藏
以てせしる事ありし先づ此正藏に傳ふる事
あり者くありたる事也

或曰二所大神宮ありて後之者と稱ふは久の何れを
曰穀梁傳有天子疾者ハ天子宗廟と云はれ
建喜曆運圓亦名曰以神武元年為周僖王三年蓋
梅僖王三年壬寅也書以傳疑耳

。二十八代の天師張廣微符と瓦に朱書して他に
志は久蛙の声を止し事輟軒録の十の久の道
士符立草と事と玉印と以て鬼神と驅ふ事
凡のト部家神籙此正字と以て馳と云ふ私言と
曰く是中道家此書にして中面浮屠ひと云ふ
たふして佛法とせし密家此秘書に道家此書
多きと云ふ事道家秘圖古事と云ふ事と云
ひと云ふ事ハ此正藏に傳ふる事と云ふ事と云
は一人の惑し神の名と書して其に秘と云ふに
るしと云ふ事

。我皇每歲十二月十日各家ノ煤塵を掃ふ事

日ありて例と似聞書所謂臘月二十四日每家掃
塵者亦如之方に似たり頃袁中郎集と見たり其
歳時紀異引王志云十二月二十七日掃塵曰除残
也云云

○東科説我列風土記此云といつて又菅原清公の
尾列記といふ書ありて秋行樂言の抄に足るなり
ハ名と云ふ云々又風土記ハ元明天皇御宇に始り
一書續日本記に其趣を足るなり朝野君載醍
醐天皇此時法云り風土記と増進也云といつて
是延長六十年奏見ヤ一本ハ凡土記の残簡
云々ハ延長凡土記なり

或向倭俗りて色ぬき此細工雁及府志に臘と
いふと云ふこれ書ハ出云云云曰定て是者下
いふに足るを伴も鞍耕録廿四に元創元範金
樽換して佛像を伴の樽換と帛と土偶をに還
て鬚（シメ）して後其土とと腕とに鬚帛儼然
と像なりと云ふと樽丸と又腕活といふ者なり
り是我回と云ふなり

○今巫祝祈禱として云々多々密家の行法習念の
事なりまを此と云ふ神祕の秘法なり祈て神
人と多々集め圖音ハ中臣後の祝詞を唱へ度
と云ふなり

ふゆの支千五百石粉授ハ大原法陽師其筆に神家
勤めゆ氣粉授と申臣福と度々思ふゆに氣成度余神
延佳後此式に足さず今社家此福僧此千部万部の程
と讀誦より給ふ思ふゆに授くあやうまや
。出雲可成浦ち水の神元るあして今も味満
細川迷舟なるの舟に
つとせなりといふとれとあむまの子あめつとを
むつと無とあつといふとはありはなや
。おね定は銀山の隣郡中修村徳死の何い
某徳死とあつと一那智の徳一とあると拾
ひ歸せ一と年月とつてあめふたきあつと

ハ十年事母石ハ一括りなりになり形老姫此ゆと
て境石とらふ石石なり四石合あつと二十五年に
わつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
大ふわりの石の塔中此形にあつと是と宗を今
徳師といふ由わつとあつとあつとあつと
。招牌市店に着板なり
。んハ飯匙にして心物にわつとあつとあつとあつと
ハ飯匙と俗にこつとあつとあつとあつとあつと
。盤ハ圓書の祢今俗ハハあつとあつとあつとあつと
。ハ植代ハ拾れ曲あつと
。杖のあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

由はなる事也

○新葉和奇集八四箭旅

信はらりあふはともの〜と此のころかあふと

いふ事なりあふの浦しゆらなるも是ははら

ら〜と云ふ

山海よりそく此里に〜もて海より〜と語をれ

写海〜と云ふの事ある〜と云ふ事あり海は海人

○喜世留蠻語なり朝鮮所謂相筒なり又其竹を

羅字と羅字ハ蠻國の名其地黒珪竹と産是

と取相筒に伝ふ左ノ名とせり

○清人其外此人をも骨き〜念珠此竹を鎖に

〜皆夷材の俗なり〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり

〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり

〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり

〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり

〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり

〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり

〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり

〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり

〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり

〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり

〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり

〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり

〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり

〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり

〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり

○藥玉の彩録と云ふ事あり〜と云ふ事あり〜と云ふ事あり

吾邦此儒者多利弊一して僧網を敷くは凡に
氷を背國運成ありし時帝都より往列に皆
學校ありてそのと勉業を修り撰擧出仕て業成
に任し政事と名をとり世表へ自ら化して學校廢
朝臣流俗を偏儒官に帝の心在る者も政教に
与らるる詔書宣命と草山のもの然利弊甚だ
かりき下は此を以て書きしを思ひ儒經と云ふ者
宗僧の或は異邦に便し且書詩銘數日此は皆僧
家の職となりて世人のわづらひしもの文の傳家の業も
して吾人の業も氷を以て終ふを捨てしものなり
り一近世藤原富貴林よりあつて儒士と云ふ世を

して漸く學問の自よふは事なりと云ふは但富
利を以て氷を以て故に其門下皆先小僧て凡僧す
又儒士此僧網を敷きりて其本國を以て其朝の
古めものなり不利を以て其者なり後也其家何事也
其人なり一僧家醫書を讀むと刀を以て施す者なり
謂洛城此九佛及び皓等此是之光明帝此
時九佛此法士佛醫者と能く一取聖詔を賜ひ上池原と
号し一民部は法印の叙して是より一医家利弊を
僧網の叙して士佛の叙して古より此ゆふありて儒士
僧網に叙するは林道春 將軍家小使民部は
法印に叙する蓋し佛の四章に依りて近年叙命

人の俗語ありと評せり
寛永通寶裏に文字あり。銭制衣むぬ文を以て春
達筆なり

寛永十幕下諸家此系譜を録せり。其時道春
等儒士及び五山の僧侶に命じて修撰せらるるに
儒士の方僧徒といひて次在り。唯列せし原僧等以
りて争論に及ひぬとせり。其年老の友是を
和してた右對座して可んといひ考つて。此と
せん。或僧富士此普門寺にありて此年と評道
春。道春はしと評しとせり。とらひ
に龍溪史曰道春の年非といふを以て改むる也

名所の沙門といふ朝廷官家の下に流るるもの
あり。道春は關東此儒官にありて其後を以て
に列して何の如くとも評しとせり。とらひとい
ふは、傳洽といひて我れを以てかくも評せり
官人僧ありと打よりて撰せり。其とを以て
佛書にありと評しと評しと評しと評しと評しと

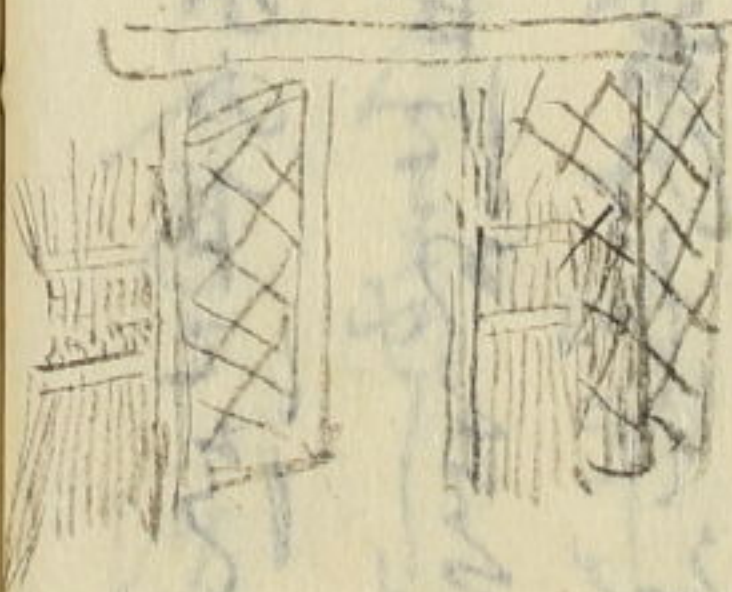
寛永通寶の裏に文字あり



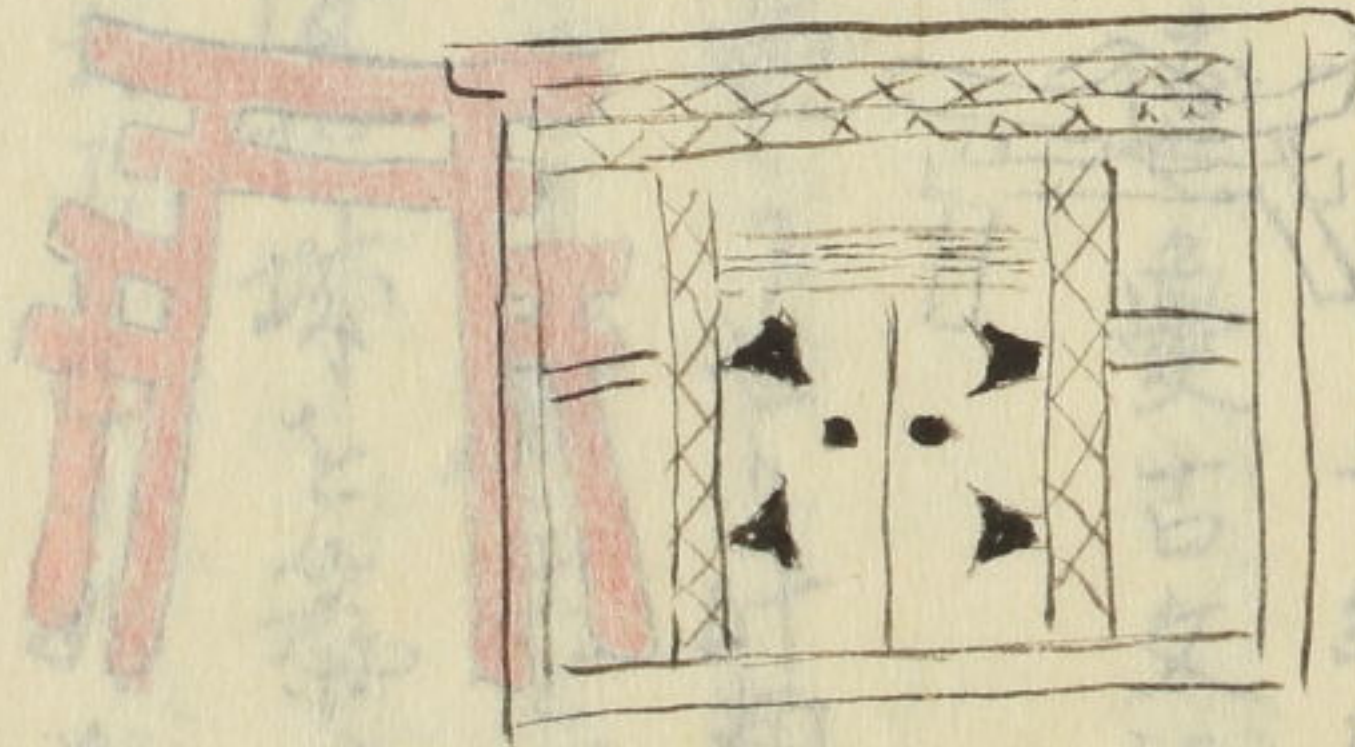
寛永通寶

。衛門^{トリ}湯

伊勢神宮の神門右制とな
 して工匠の造と二枚の板を
 拵も該社の之を和と異なり
 今時村流の門造に似たり
 老朽、是は右首の質也と
 云ふを、今も門を板と
 するに



此板門より板比し、ち
 め、すく流せしことと
 して、禊の所令と
 考ふ、翁より傳へり



[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '注林正及' and '幽閉古久注']

法社の多し其の多しを以て物作らるゝものと工匠
修し其の多しを以て物作らるゝものと工匠

ハシ夏 指しと云ねの指と申

木を以てしけいひものと云ね

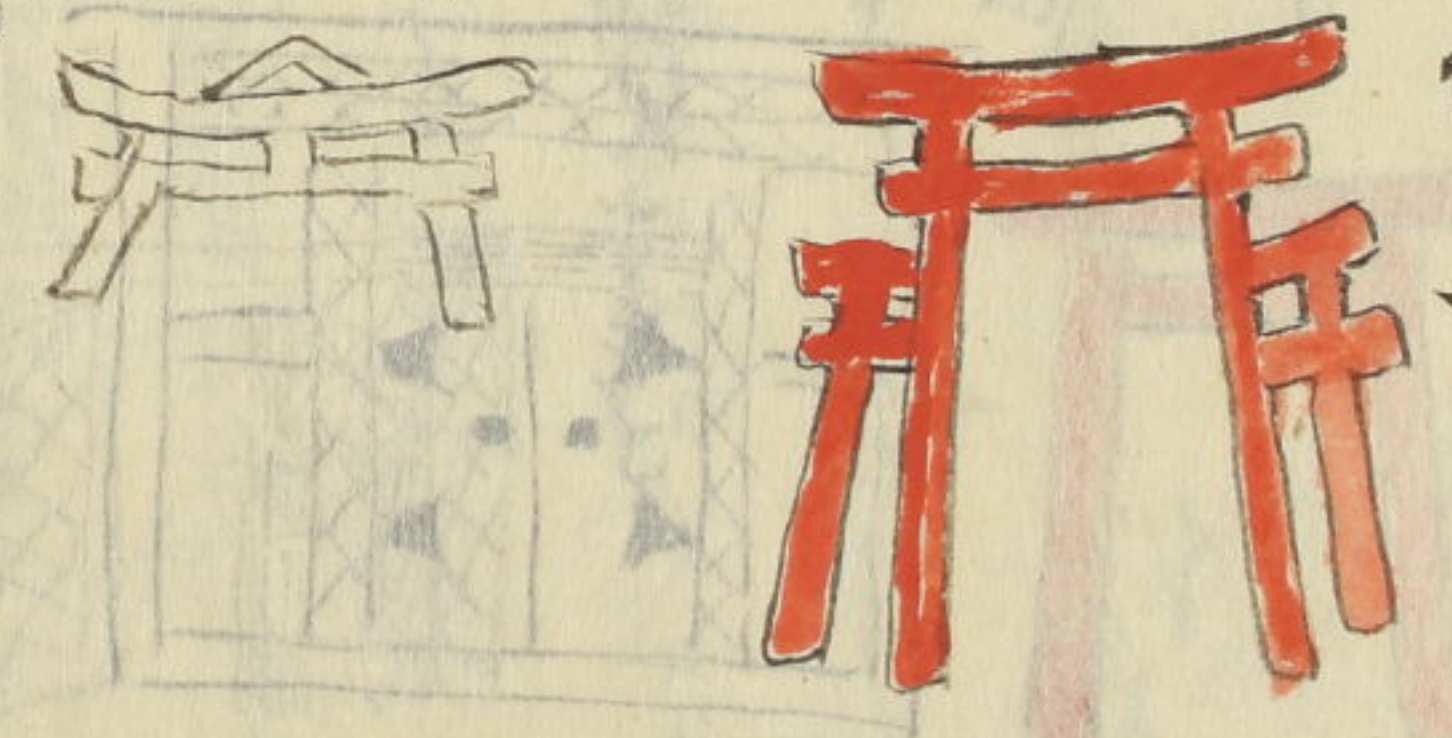
多し指しと云ね 皆後世の

制あり

多し木の工匠凡と仰ふものと

総今多し指しと云ね

日吉の社此羽白合ノ制



。蜂篋古文注蔓五邁及按當作丑幽闕古久注
。關竹身及按當作苦真及遠曼古文注林正及
按當作体正反

古文を誦し其の者看過りせり叶類を多

。松永久季多聞城を築て始て殿主と仰り人長彦
を仰りて士卒と指しむ後也城を築て多聞此
城を横しと呼んり多聞と云ふ事不始也

。古川文山詩を陳文贊に贈り其楮尾朱印と施
元政賢カ曰ル文字を深し印を押し今下其を
知し或ハ壁上に掲げ或ハ後人に傳へて其
今又山此文字を我玩ぬに出るはと云

今時詩を他色印と施す所ありてなり

○甲申正月十二日此夜遠江國筥ヶ崎坊新寺に僧侶の
名を記ししと預りありていふに今也の物と

始に美奈路神と俗に云ふに石に記ありて

寺小細の佛を名に記しし春秋傳云正月丙辰於

宋としる新なりし星落て石とありて天文家の

説星宿ハ落る事一也中天より流る所也疑

結一石とありて光物の高を記し天鼓と

いふ

○或同神社小名神と大名神とあり凡大社八位名神

一位あり云文德實錄仁孝三年六月以尾張國多天神

預於名神同七月加尾張國多天神從五位上紀道公

社也又名神小名神と社多し名神祭式とあり

多天神一作於保時或作多神社神名多郡

崇嘯神社録大神神社為志神大是也慶會堂昌

曰大神の神字術文ありと今中流新丹羽在於保村

天皇の社是なり貞治三年本國帳從一位於保名神

云今荒廢して小祠とあり

○我知多郡野間庄柿並村大御上皇寺ハ贈内大臣源

義朝香火の寺にして今長野萬徳寺支院也東鑑

四日故老丸典ハ殿墳墓在尾張國野間庄無人奉詔

只荆棘之所掩也而康賴任中其國時寄附當新

を厚くして利刀と胸のわの夷人等恐懼之れと云
く云日本人と悉く解して積敷と云ふはたすけんと云夷人
こそ我商と云ふは貨を水に運ぶ船を白船と云後
ゆきと云ふは船と捕刀と云ふは海をにゆき
船よりくく賊とと敷くは船と急船と云
と何け夷人いんと云ふは船と云ふは我
を山帰る台聴の達一船と云ふは船と殺す
伊島夷等追来りて大きにあけと和と云大樹
百貫の法大老一五十貫め毎年貢出と云
て物、毎年納して貨にかりて年貢と云ふは
期と云ふは船を殺すとい夷等諾して海に
舟の北と云ふ貢納と云ふは船と云ふは船と

賜ひて首を二一のみ命と云ふは留置の夷
を殺すと是より毎年来りて船と土宣に依り貢出
と来りて夷に依り故一治小治と云ふは船と
お浪田舟の勇敢の功に云細川家に仕へる性強
異不道の者ありしは浪人といは後山崎の事
ありし其流るる不と云ふは船と

俗已々甚不好底れおと云ふは式人等と云ふは
略なりと云ふはに云ふは船と云ふは船と
矢にゆく毒物なり蝦夷と云ふは船と云ふは船と
をいし貢出と云ふは二程ありと云ふは船と云ふは船と

賣りありし何とて四つ矢にありて物と射た散る
なりしよとて方よりと夕陽すさ物とてつうよ
とありし

○ 寺社の什物ハ何の用にもなると古くを花を愛し
多分ハ竹を居る多分ハ玄上琵琶の換る我居
田の神庫小真柄ハ古の鞆ありし他寺社如数
一 物庫庫 室物多分中 小白菊此琵琶長明
う車琴等此ししとてたにありしとて
○ 水上柳子神社ハ舊田之の別宮つり人尾張氏代
祇園殿よりとてあ祭にて祝詞と勤む道此大司
家故あり傳る居すありし 甲申水上此祠宮本氏

詔て曰昔社々惣向の由縁にしる末氏代
に供も物にを年大司社とて傳る祝師と
ら一社よりとつりしむ古例もたしとて
此水とありし一仍て有司尾張中し詰回し
證文とありて曰水上の祇園殿ハ我家司
物中尾張守伴奉讓狀の

讓子諸卿

- 一 祝師 祇當屋敷等
- 一 社殿 給分領其外意
- 一 水上 祇園其外諸祇等
- 一 中 ありし方惣領祇事

右代々御重書等相別々記原之冠和子圓所續徒
實正也但庶子配命之事ハ為成敗少可有枝耶
定並上ハ親類非妨者也仍為後日讓之狀如件

明應六年 五月 廿一日

權官司祝師尾張守仲春判

わくのしつゝわりのふりてことゝ不念新に己入して
社事と信をさふんと欲しわりのふりて信所誼へ
けりしと

○唐經分類卷之四色人名字論語三卷云

按よりん金沢の大本聖經と云ふと後世好居
經と云ふもあらずしと

○密宗家護麻子の付主天をみりふり字に白紙と

し主串とさし土家以供物を成すの酒と

る串と其串ハ白紙 白紙 乃移る陰陽師所

系後にはさし串と一般なりおる串ハ

る、但し信者より信りてさし串ハ

祀と云物も是に似たりと云ふと信をたす物と

りしと云ふなり

○尾伏川西の御幕布及の白紙と信さやの

十九年上月三日駿府より敬公に

○陰陽家波多利女と云す信神祀

亮一実と云す日本神道密記に

長姫の命と次鳴呼まへるべ

○散位傳訓 別稱

○平家物語の相重盛金二千両とありうに終る

抄のとるやうく事も一千両八百王山の修ふひり也

一昂佛照修而性光は所て音にせり

左五百町北田代を云日王山一寄せらるる事計

證印ありとて細川氏北畠氏佛照の書

初さしてありとて一字

王瑛永頌要修行日用應預痛著便會得个

中端的意徒教日午打三史

佛照老僧

古

（注）

判印證狀らうと久ほ何とらるる事原主念と

よりし事案更に及るる但定更四百九拾日日本の條

下軌道九年附明別細昔以方物各員云更に我

る念院兼安三年は南は是重盛施金の時なり

○嵯峨帝弘仁六年四月近江國志知寺事法に事

宗福寺永忠大僧都ははしと宗と宗と宗と宗と

及るる我玉宗ありと久し梅尾明也宗福朝府

茶の種と持牛して肥前玉方振山に柱山石と宗と云

後小梅尾に種又宗宗宗宗宗とてとて宗の院

法寺大夜玉師陽別金山寺の宗子一呼るを宗と

建長寺の什物とてとて宗宗宗宗宗とてとて宗の宗

○咄 説文咄相調謂也以口出聲云は是たふふ
物よりいふを云ふ也 訓まは是あり

○物の屈塞と云ふはとちのよりさう南都春日の鹿
を鹿神と云ふもあまのつとを給ひ人の近つさう
にさの自今春我の精果めしつとを給ふと云
つてより法人のよりさうとちのよりさう
云ふものなり

○用東少云ハ本伊達我某の僕東都は在し海侠於曠
當時呼て伊達少六と稱して今治容游決者と云
云ハ彼より凡の似うもあり
○世に古少強護あり者と丹波御中と云是列の也
知那日並此城の織田丹波守の角力者助を命と云

性險躁驕易にせは法領城に性集はる路動止れハ
念忍を發し一辯口とて村長を強忍を長と云
く好に刑せし後人險險利と好とを誣るといふと
呼し

○美濃岡廣見素見寺に千代北丘尼の像あり尼は全
越後守顯時の女にせ足利護政守源貞氏此後素
繼娘後出家して無著尼と云如天禪師と号せし
始松見寺に名を隠して信長八月十夜酒に
あを汲時桶脱落して水随てその急流に
歌と詠せしものなり桶の底に
うはしはし

。好湯念に為り佛光國師に謂く一宗師として聖一
國師小齋を以てしつと名をききしとハ宗氏継母
左やうと

。司馬子長、方下の名山太川てりしなりなり
こゝの紀行書一とわきまの我國書之の流
日記と稱西行法師の御記に在りてある所
。皇朝のありしと後世のありしと觀念の此處念
師、之つこのつと佛傳傳記ありしと
こゝの紀行の海邊記と長崎のありしとありしと
記、建礼の院在京を更らばりしと代紀のありし
ありしとありしとありしとありしとありしと

。新田義重建仁二年正月十四日卒之也

東照宮御在世此時奏問あり從二位鎮守府將軍と
稱りしつとありしと

。尤中納忠吉御所室宣實永四年九月二十八日卒也
早清泉院号定窓榮木正大師

。三洲吉田に東土遠が見附ありしとありしとありしと
わが家紙考傳りしとありしとありしと

先四日此末より試みたりしとありしとありしと
河原くありしとありしとありしとありしと
一紙有たりしとありしとありしとありしと
とありしとありしとありしとありしと

走馬りり起りてあぬ祈仕佛國へと尋る
にちりりおれしうやみ孫のう育寺馬此は喰養有る
あらゆるうさ借しし受つらん

○異那北御食夜日中の膳部に何れと

粘果 椰子 桃 龍眼 水果 密柑 九月 丹栗

米食 炒米 糕 瑞味 鴨 鴨 鴨

湯味 諸魚 米 手 二 願 明 口 湯 野物 湯 肉 在 湯

餅餌 饅頭 豆 沙 糕 熟菜 鹿 節 魚 肚 鴨 珍

鹽將 將 岩 砥 肉 桂 鹽 播盆 こいハ 密 餅 二 三 魚 等

胡 餅 山 椒 等 多 右 取 木 十 般 多 余 ハ 二 三 次 一 七 多 一 一

○わらうーいん所等あつたは八りううあまのたけのこ

ハ家小造化の巧をううの家との飛行振ら苗はきう
をるをエを壇を打ちやセエキとをりて粉を此に信ふ

そい今らふとも露青 正月 節 燕 心 年 二月 龍 影 須 筆 四月

○掛別大坂二月十五日六日九日九日北きく南凡あつたを
掃俗貝寄と云け時うめり毛塚七度渡高君殺者

萬打寄り也北祢呼あうあまを捨いん天王寺一
を寺傍着しゆ物と信ふ物ほり流を情め何め如く

細とましくわけし糊しそ彼あがいと物おひりし粘
しそまきん小かきり二三百聖具會舞樂の時石

○唐寅のし手勢田神宮寺の阿伽井と後一信りし小

○井ノ原水と汲つく——土を揚 小砂俵ふるごめり
土中より鳥のおらこ——鳥を思ふ鳥ぬたさあて
空よりけりぬあくあけり作りぬえ——人ぬき
いし希有の事なりし物りふ醫王殿北院と存
宿やうそめりあつたりん

○角黍 端牛時食 ちうり——糯米のうらにひくし 洗
てぬれりちゆに漏らさし作れば又二葉草はくつ
○胡椒と入て火をゆりく焼く——煮或は煎の事
こけ包れと去りし縁はしやし食をけりてあひか
○天正十二年四月廿九日の夜破さし時池田の残平
長久の伝人丹ね吉三信うあくと礼放を信あひ女

ともてあふ去——ひるはた名川と不徳也
打押しと——と中あしして山を名村を初めり
あつりる——信あひ信あひの若もはるしては村
津原禪寺と名は信り——元禄十二年此を名村は信
死作りし信危とるふ今我の時と名村は信り
——は

○大塚源道はと廣る坊と信し利根の志と野に
信や、信りに海へ信信に兼信師事信同執柄
以下信信し云云物と中せ公家にもあられ信
ありしと名も同明ハ我信の軍の時信の信
て信りも大塚の志は信と信せし

寛如

権中納言兼仲

善

権大納言俊光長子
故名信玄

寛如の子光玄其才甚俊比白俊光長子

如とも本願寺の任に降く

綽如

権大納言時光長子
名將義玄

巧如

従一位資原長子
名玄康

他より計道如ハ終内大臣兼直光長子寛如ハ大臣
勝光長子内如ハ権中納言永純長子也但内如
公代に在立計等傍の事といふと如や折貴介の
子として家と高より為なりや其に佛者の如く
あり

。本願寺親鸞の子善鸞其子如信の孫存光の子

権大僧都細殿号慈観 江別錦織寺の宗祖なり

。舟宮頭藤原叙用を舟屋と号し舟屋頭藤原

為宣と号す藤と号すは皆宮と氏とと略し呼号

あり其子孫直に称号し以加賀守藤原景道と

加藤と呼しなり子孫如を稱す

。在原實直其馬允實遠の長子と号す舟屋と号

し子孫舟屋別當宮内卿の子孫武蔵守と号す

左近守と号す此の女系に上に至りて稱す也

。善光寺の佛始庵張國良田宿に於如來と稱す

如し立向なり

舟屋に波像と向すといふ善光寺を修りけり

是向此田宿今所下は行て溜屋町善光寺と云

口室をヤトシ公方に向つて行舟社の勇欲をやりされ
んふとやせり位階ありて朝子班にありて官ありて
職を相さむる物を賜えり遊むるの豊長秀
吉神君古夜に事候の目月旅邸にありて
懇志をゆへり一語を法安志を承りて四時の
交りて筆一玉候ふもり法有れとて此
威を傳りて月夜階さむに似るに正位の内官
とみして交りてんふ又強りておたふしけ一筆
にありて高野寺に官位を合しとてとて
場貞後甲申

十七日談

○或曰求衣鐘ハ筆架此のやりの行り候の事ありと云

予曰潜確居類書八十九。文具筆架の條云。致虛閣雜俎
義之有巧筆架名扈班敵之有班竹筆筒名求衣鐘
也無其匹といふ求衣鐘ハ筆筒の名なり此は右に
も次マこれと筆架と也ハ右に候とてかたがた也
佛前此を多くハ海深碎に斗帳の字あり小帳也
形如覆斗といふ斗帳と云へり
○三別碧海那平田庄上野城主と此右の尉物部照氏ハ
新田丸兵衛佐義貞屬し其切あり其裔ハ引割
とてし祿年とて平岩と斗頭親吉等ハ此
○官位問答に昔ハ六位の者も此ハけり然れども
一後多段より棟制ありて此ハ此にも如く制

。法初帝此孫なり清和の御舅のち此と御座
たり又いから矢神といふもの神功皇后之御孫と証
たりにたりていふ云八幡大神と御座の御孫に
嵯峨帝此勅ありて存原義家御座に候へば
八幡大神と号し是よりよ小男と号す
義家此御座の御孫と号し是より貴人御座
皆石清水といひて由社とも又八幡と号す御座
事一託宣集に八幡大菩薩現七十許老翁白
髪之射持白木之弓以甘藤卷之矢立国土全経
是將つと征一の時ありと云ふ是等と御座り
秀神といひ形を化す御座りと云ふ幣と云ふ

乃より今八幡がてて武門のさふなる神とい
思ひぬ又神此神と現すと云ふ浮屠者其を誣
山皇信より云ふ也や八幡宮ハ太子此御座之御座
ハ此神と神といひ此神といふなりと云ふ異神と
や兼平に将門殺せし時祈りてをひりハ
情一私に何れ御座此御座の御座也云
神ハ秀といふなり其神ハ奇端御座と云ふ也
事身一皆正史載しん不に候は五子又是と云
。唐を志江たると傳訓を今俗志忘たると讀
いしはたれと志江の切也あり抑音に讀むも
字にたりてあれも唐と云はれたると云ふ

○笠歌本に「忍」と誤アウケと云託也り也

○武向豊前國高良山カウラハ字音句是ハ在リ

右に安名を倅ハリ曰是 亦曰春也カハ下訓續集

紀兼和四年條に豊前國田河郡香春三社と云是也

○我玉古へたときいせりしを腕を腋やうたす中

世と著袴の時腋やうに一様流るるきの時より

少袖と著ししと古記に及んたり

たすくは練綾紋ハ小葵よりハ中平絹之幅懸

緒此ひろき守治兼三年東宮德清著袴時著

袴の中好知の人あまにゆりてゆはりて月られは

著袴ハありしと云 草衣和言集 ひとくし

婦人の首腋ありと云さきと 裙帯領中ハ肩に
しんたーと云也

○魏州安徳郡柳本より有堂家の領下に貝石山

山石のありしと云石中に石貫あり石と砂をわら

しと云禪くにして螺の殻蛤の殻あり其貫して

玉をひきて己の玉或人元身して凡也俗象

○宇賀神より頭ハ老人の形に身ハ蛇形に後蛙若

さへたるさへし神仕に安生し安生し安生し

と云修儀を入云の真名井のありしと云と唱て

し像を浴して後或ハ金銅 又ハ磁器 魏州正殿内御冠宮儀

修儀ありし自享御修儀の時也也 此ハ脱稿のり

巧多ゆりし梅すのに宇が耶ハ林几語に―して
白蛇と譯すもと密家此流法に神人然し信を
所せしと名あふれりし信家字の別字なりハ人首
蛇身の像ハ信ら所又信の上ハ蛇を形して宇が神と
云山國福前けり寺ハ中世我至のハ作ありて人首
の蛇にけ信り辨才天子辨財と平頭上ハ蟠蛇と信り密家辨天
なりとソノ密家のハ信らりて事ハ信らる此形
像も又と祓と信らりて一二にありて

。因話録云余年小在江漢與君等兒戲以舞為
銘鳥羽飾其上列衣紙為旌旗作戰闘之像云云
我國鴉牛小兒の戲我も又ありのこゝ倭漢地異

なんとい人信のまのぬそはてまゝと信り

。まら信れり。あふりの。ま信と。さよととの。びらあふり。
かゝりしとあり。古家集にけり信の信りてまら
のハ志熊也にけり今此本宮なり。あふりハ奇俗の
ま信ハ路の。さよととハ男の稱。ひらひらあふり
くしてハ信りてあり。ハ信りてあり。初宮奉祀の信
まらととりの中より信らると本宮初宮三階堂を奉命あり
かゝり

。清波新志項年西湖上好事者所置船舫隨大小皆立
喜名ヲ如丸星槎凌風舸云云

。府下聖徳寺初在富田村 竹屋本親結鳥より所屬て七種あり

筑前守と云ふ大納言何人と云ふも、為らね浄善寺
に其居像あり、如安と社を建て、勝と讃へ、天文八年八月
朔明神の化、不ちと、計の子孫又ハ諱ハ某と云ふも
あり、嗚呼我礼不あり、武人多く、官を備へ、武其守
或ハ某大浦等口蓋ありして、自名アリ、到大納言とも
備へ、一分を懐物と云ふも、先立ち、彼大納言といふ
もの、二十四日、此時、古安を、師と云者、凡、厨法を殺
さし、せり、と、あ、之、賢、及、出、ハ、一、時、の、強、勇、に、し、て、和
奇と詠、一、福に、あ、せ、一、其、に、い、と、い、や、し、初、道、行、
村、其、事、案、に、足、つ、を、大、納、言、の、故、あり、十、二、年、を、此、年、初、を、道、に、
あり、其、事、案、に、大、納、言、の、人、を、け、子、大、力、に、自、ち、所、と、是、事、判、
る、也、中、所、殺、サ、ル、大、年、長、し、後、今、山、記、あ、り、け、中、ハ、丸、の、多、し、ウ、ラ、ニ、書、ナ、リ

○曾良玉室ノ事

源仲正

鳴らんとて、吾、此、者、に、一、ま、ら、し、と、し、け、し、な、り、と、い、ふ、事、也、
之、河、玉、舉、母、の、里、中務親王
わ、さ、し、子、の、衣、此、里、の、柿、の、皮、さ、し、し、れ、前、并、の、衣、は、さ、し、
三、河、玉、矢、初、里、夫、本、為、家
あ、つ、さ、ら、や、え、と、の、里、の、く、ん、柄、花、屋、の、の、り、我、と、い、ふ、
弟、の、名、玉、赤、夜、夫、本、為、相
白、く、さ、ら、の、花、い、さ、な、う、し、あ、り、坂、の、名、と、い、は、し、て、つ、ら、
弟、の、名、玉、と、い、ふ、事、于、首、為、尹
作、次、山、と、い、は、し、つ、ら、り、と、い、は、し、つ、ら、り、と、い、は、し、つ、ら、り、
弟、の、名、玉、赤、夜、夫、本、為、家、と、い、は、し、つ、ら、り、

塩たれし海に此の海をうめしき人か神のまゝ

知事殿のふりかへり

新井権三

巖阿上人

鳴海のふたつをまじりて友とていふの海をうめ

女明

あま

いこいこい海にハねのこもいこいこい海にハねのこ

あまの海にハねのこ

ねんねんねんねんねんねんねんねんねんねんねんねん

鳴海のふたつをまじりて友とていふの海をうめ

さ市連黒人

新井権三

ねんねんねんねんねんねんねんねんねんねんねんねん

あま

志保の四代子孫ありしよりよまれば田をばりて此の地を

中修殿 善白社にまじりて

そはれ声はしりていそいそいそいそいそいそいそいそいそ

中修殿 善白社にまじりて

阿佛

あま

一はまみりてあつてやうあつてやうあつてやうあつてやう

中修殿 善白社にまじりて

神社あり

日蓮のまじりてあつてやうあつてやうあつてやうあつてやう

雅經

約まじりてあつてやうあつてやうあつてやうあつてやう

あま

竟孝僧都

ねんねんねんねんねんねんねんねんねんねんねんねん

